

しびのーと



高松市美術館
ボランティア通信
2001年11月

「デュフィ展」誌上ギャラリーートーク

RAOUL DUFY

ラウル・デュフィ(1877-1953)

デュフィと音楽



《赤いヴァイオリン》1948年頃 ボンビドーセンター・国立近代美術館、パリ
photo: Centre Pompidou, Paris © ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo, 2001

彼は音楽をモチーフにした作品を数多く残しており、その音楽への深い思い入れは、年々豊かになり、ますます響きを増していった。

こうしたデュフィの特色をよく表わしているのが、《赤いヴァイオリン》(1948年頃)である。この作品中の楽譜には、ラウル・デュフィの音楽と絵画“というタイトルが書き込まれており、目には見ることが出来ない音を視覚化させることを試み、実際に音楽を喚起させることに成功しているのである。楽器の中でもヴァイオリンに対して特別な思いがあったのか、同じ時期に、同じタイトルの作品がもう一点描かれている。

デュフィの作品にしばしば登場する音楽というテーマ。彼にとって音楽とは何だったのか?!

それは、中央の四角い白色の面がアクセントとなり、基調である赤色とコントラストを見せているのだが、本作品ではサッと塗られたようなヴァイオリンの赤い色、その赤が映えるテーブルの黒、そして背景の淡いピンクが、絶妙なハーモニーを奏でている。

印象派のモネが、アトリエの外に出て、太陽の光のもとでモチーフを描くことにこだわったのに対し、デュフィが求めたのは光だけではなく、そして形(輪郭)と色彩についてであった。そのこだわりを、もう一つの作品《ヴァイオリンのある静物・バツハへのオマージュ》(1952年)で見てもよい。フォルム(形)と色彩とをズラして描くことによって、画面の中には、音があふれ、響き渡る様子が感じられはしないだろうか。50年代のデュフィは、バツハ、モーツァルト、ドビュッシーといった作曲家へのオマージュ(賛辞)を数多く描いている。彼は音楽というテーマの中に、作曲家をモチーフにした



《ヴァイオリンのある静物・バツハへのオマージュ》1952年 ボンビドーセンター・国立近代美術館、パリ
photo: Jean-Claude Planchet © ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo, 2001

独特のスタイルを持っていた。《作曲家へのオマージュ》と題された作品では、それぞれの作曲家によって主体となる色も決めていたようである。バツハは赤、モーツァルトは青、ドビュッシーは緑といったように、作曲家の個々の音色を色彩によって表現しようとしたのである。

12月9日まで高松市美術館で開催される「デュフィ展」。彼の音楽と絵画への深い想いもご覧ください。

〔石床亜希〕

コミミ
お話し

* 美術館主催の特別展では基本的に毎回、初日の10時から開展式といって、関係者が挨拶やテーブルカットを行なう式典があります。

じつは、この開展式に参列された方は、なんと無料で展示室に入場できます!(ただし、常設展への入場は不可)

* 他にも、以下のような方は常設展・特別展ともに無料で見ることがができますので要チェック! ①65歳以上の高齢者(長寿手帳等が必要)

②身体障害者手帳・療育手帳または精神障害者保健福祉手帳所持者 ③第2・第4土曜日の小・中・高生(ただし、春・夏・冬休みの間は不可)

突撃 アートの晩ごはん

1

前回好評だった池田満寿夫の手料理の記事に続き、今回からは食とアートの接点について考えるコーナーを連載開始!!
(続かなかったらスミマセン!)



ジュゼッペ・アルチンボルド《肉の血／コックの顔》1566年頃
板・油彩 ストックホルム国立美術館蔵

かつて朝のテレビ番組で、よその家の食卓にアポなしで上がり込んで味見をするというのがありました(まだやってる)。当コーナーでは、そのノリで、毎回美味しそう(?)な美術作品を捜し出し、勝手に味見し、勝手に感想を述べていきます!!

記念すべき第1回目のメニューはジュゼッペ・アルチンボルド(1527-1593)の《肉の血／コックの顔》です。讃岐人なら「むっ(こい)」「(っ)っ(こい)」「(っ)っ(こい)」と思わず叫んでしまいそうなく、豚やら鳥やらを焼くか煮るかしたような脂っこい料理が皿に盛りられています。見ているだけでお腹が一杯というか、胸焼けがしそうな料理ですが、日本人にとって「あこがれ(?)」とでもいって「子豚の丸焼き」や「運ばれてきた時にバカッとほすされるもの」というアイデムにはそそられるものがあります。

ところで、タイトルに「コックの顔」とありますが、これは、体何を表しているのでしょうか?じつは、この作品は上下逆

さまにするると異なった像が現れる、いわゆる「上下絵」で、180度回転させると、血の上の料理はグロテスクな男性の顔へと変わるのです。図版を逆さにしてみてください。鳥の頭は男の目、鳥の胸は男の鼻、料理を載せた皿は男の帽子、

といった具合に個々のモチーフは全く異質なもののへと変貌してしまっています。レモンが帽子の飾りに変わるのは「やられたー」という感じですね。

アルチンボルドは16世紀後半にハプスブルク家に仕えた宮廷画家で、植物や動物や道具などを組み合わせたグロテスクな人物像で名声を博しました。死後は長らくキワモノ扱いされてきましたが、20世紀に入ってから再びシュルレアリスムの観点から再評価されるにいたりしました。

彼の描いた上半身像は、いずれも宮廷内に実際にいた人物の特徴を写した「肖像画」だといわれていますので、この人物もおそらく宮廷に仕えた料理人だったのでしょう。描かれた本人はどのような心境だったのでしょうか?それにしても、料理人の肖像と料理の盛り付けとを二重にダブらせるという作業を、無理の無い上下絵でやってのけてしまふ、作者の発想の奇抜さと絵画的技術の高さは、圧倒されるばかりです。

【牧野 裕二】

主な活動

2001年

8.1 しびのーと(高松市美術館ボランティア通信)3号発行

8.1 直島文化村訪問

9.21~10.21 「池田満寿夫展」ギャラリートーク

10.5 北見文化センターボランティアと交流会

得られない貴重な体験でした。

そして、直島・家プロジェクト「角屋」。築250年という古い邸に一步入れば、そのたたずまいからは想像もつかない満水のプール(宮島達男《Sea of Time》98)。その水の中で延々と時を刻むデジタルカウンターは、直島の住民一人一人によってそのスピードが設定されたと聞いて、夢空間・直島がまどろみの中で独特の時間を刻むように、百人百通り、千人千通りの時の流れがあるんだなとしみじみ実感。

様々な思いを後にして再び船に乗り、距離とともに気持ちも徐々に日常に戻り、家に帰ってニュースを見れば、その日は気温37度を優に超える記録的な猛暑の日、黒く焼けた肌とともに心もうんと熱く燃えた一日でした。
[池田幸子]

海のそばの美術館ならではの作品!と印象的だったのは、波打ち際の2艘の舟を描いたもの(写真参照)。一枚の絵なのですが、その前の床には描かれたものと同じ黄色と黒の舟が無造作に置かれており、振り返って光の射す窓から外の景色を眺めれば何とびっくり、眼下に広がる海辺にも、やはり同じ黄色と黒の2艘の舟が見えると言う仕掛け。作品は美術館の中に収まらず、窓枠を額縁に見立て、借景どころか自然の風景そのものを美術品にしちゃったという広大なアイデアに脱帽です。館内の作品を楽しんだ後は、キャンプ場まで歩きながら戸外に点在する作品を散策。青い海を背景に緑萌える丘に現れたのは、自然とはおよそかけ離れたメカニックの極致をいく3枚の正方形の金属片(ジョージ・リッキー《3枚の正方形》)。それが、そのものの感じさせる重みに似合わず風に揺れて動く様は、本当に、自然と人工との調和の妙を感じさせる絶品です。

美術館を離れ訪れたのが、「南寺」(ジェームズ・タレル《バックサイド・オブ・ザ・ムーン》)。明るい街角からいきなり真っ暗闇に放り込まれ、ゆっくり研ぎ澄まされてゆく五感、視覚の胎動を感じた瞬間のあの新鮮な感動は、日常生活ではとても

9月21日「池田満寿夫展」開始に先立ち、オープニング・セレモニーがとり行われました。今回は、特別ゲストとして池田満寿夫晩年までの約20年間に共にされた、パートナーで音楽家の佐藤陽子さんがご出席されることもあって、開式前よりスロープに長蛇の列ができました。

池田満寿夫は1977年の芥川賞受賞で作家としても知られており、ギャラリートーク当日の来館者は彼の生前の活躍に注目してきた中高年層が多いようでした。入口でまず立ち止まって作品全体を眺める方、1点1点タイトルを声に出して読み上げる方、それぞれの方法で鑑賞されていました。

女性というモチーフ、エロティシズムというテーマに象徴される彼の作品には、最初抵抗がありましたが、ライフスタイルの変化と共に移りゆく作風はどれも新鮮であり、特に1983年に始まった彼の陶芸における日本回帰では、新分野への

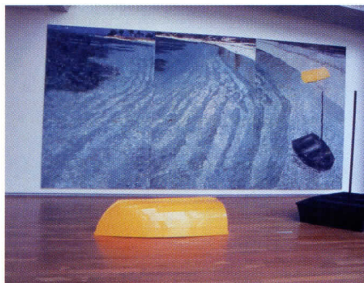
彼の挑戦に圧倒されてギャラリートークについて熱が入ってしまいました。

来館者にお聞きしたところ、ポスターを見て来られた方、名前は知っているが作品を知らないから来られた方など、きっかけはさまざまですが、皆さん、彼の作品は大好きだとおっしゃっていました。ただ、分りにくいものもあるのでギャラリートークの説明が理解の助けになりましたとのこと。鑑賞者のお役に立てたのかと嬉しく思いました。

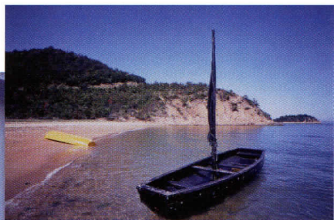
ちなみに私のトークは、オープニングで佐藤陽子さんが話された「池田満寿夫は芸術に大胆な人でした。常に挑戦していました。必ずしも進歩ではなくても変化を求めました。ピカソを目標とていましたが、創作活動ができた年数は彼の半分しかなくて残念です。でも求めるところは同じでした。」との言葉を引用して、締めくくらせていただきました。

【岡岡洋子】

直島文化村探訪記 [8.1]



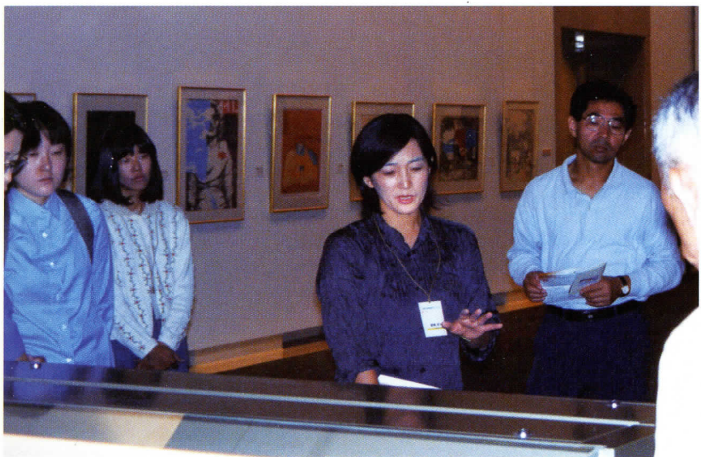
ジェニファー・バードレット《イエロー・アンド・ブラック・ボート》1985年
ミクスト・メディア ベネッセハウス直島コンテンポラリーアートミュージアム



美術館でおなじみのジャスパー・ジョーンズをはじめとする現代美術作家の作品を皮切りに、カラフルな蟻の巣をつなげた作品、石や流木を並べた作品、「え?これ、作品なの」と思うような、廃材を利用したまるで倉庫の棚らしき作品。また、いかにも安藤忠雄さんの建築らしいコンクリートの部屋には、広い空間のなかに体温を感じさせないデジタル文字が次々点滅する超現代的な作品、ところが浮かび上がる文字はまさに人間の「生」と「死」にまつわる100の言葉。ガラッと雰囲気が変わってさんと太陽降り注ぐ一番大きな明るいフロアーには、巨大な人体と思しきもの(?)が口をパクパクさせていたり、中庭には大きな心地良さそうな大理石があり、その上に寝転がると、見えるのは切り取られた四角い空ばかり。これぞまさに

8月1日、快晴の空の下、朝一番の船に揺られて直島探訪に行ってきました。迎えるマイクロバスから草間彌生さんの巨大な南瓜を横目に見ながら、一路「直島コンテンポラリーアートミュージアム」へ。現代美術と言えば、つい都会のイメージが漂いますが、海に囲まれた島の南端、高台の緑の中にまるで桃源郷のように突如現れる近代的な美術館。中は小部屋あり、大きく見渡せるフロアーあり、階段あり、スロープあり、色々なイメージの空間が揃って、ちょっとした迷路のようです。高松市

ギャラリートークを終えて [9.21~10.21]



高松市美術館コレクション

侍女ドニヤ・マリア・アウグステイナから見た王女
マルガリータ、ドニヤ・イザベル・ベラスコ、矮人マリ
ア・バルボラ、矮人ニコラシト・ペルトウサートと犬
1992年/アクリル絵具・パネル 227.2×181.8cm 高松市美術館蔵



まず、絵をとくくくご覧ください。
「ああこの絵は見たことがある、有名な絵だ。あれ?でも何か違うな、どこか変だぞ」と思われたら大正解。確かにこの絵は世界で最も有名な絵の中の一
枚、17世紀スペインの巨匠、ベラスケスの代表作《ラス・メニナス》:ではありま
せん。この絵を描いたのは、日本若手の
現代美術の第一人者、福田美蘭。そして
今この絵を見ているあなたは、350年
の時を遡って、その当時のスペイン国王
フェリペ4世の宮廷の二室にいます。
さて、もう一枚の絵をご覧ください。
こちらがまさに、巨匠ベラスケスの《ラ
ス・メニナス》です。2枚の絵をじっくり
見比べてみて、福田美蘭の作品の余り
にも長い題名を読んでください。もう

お判りですね。あなたは、ベラスケスの作
品の画中人人物の一人になり代わって、他の
登場人物たちを見ているのです。
福田美蘭は、1963
年2月東京生まれ。父福
田繁雄はグラフィックデザ
イナー、母方の祖父は童
画家。現役で東京芸大絵
画科に入学し、25歳で最
初の個展、26歳のとき具
象絵画の新人登竜門であ
った安井賞を史上最年少
で受賞して躍馬スコミの
注目を浴びました。以来
精力的に作品制作に励み
2年前には僅か36歳で1
30点の作品を引っさげ



ディエゴ・ベラスケス《ラス・メニナス》1656年
油彩・カンヴァス マドリード、プラド美術館

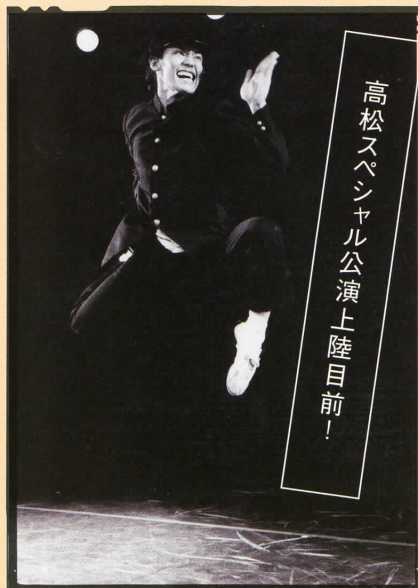
て回顧展を開き、話題となりました。
彼女は次々と色々な切り込み方で、美
術の既成概念に対して問題を提起し続け
ていますが、この作品もそういう試みのひと
つ。私たちがよく知っている名画を、その中
の登場人物の一人の視線から見たらどう見
えるか、をコンピュータのように正確に解
体し、再構築しているのです。ここで彼女が
気を付けたことは、題材として必ず、皆の
脳裏に刻み込まれているような歴史的名
画を選ぶこと、そして、その名画の作者の筆
致にできるだけ似せて描くこと。(ここでは
ベラスケスですが、彼女は同じ手法でダヴィ
ンチ、ボッティチニ、マネの作品も取り上げ
ています。)この絵を観るものはこの作品と
記憶の中にあるベラスケスの作品とを意識
の中で合体させることによって、描かれた空
間を三次元の世界として把握することにな
ります。絵画の宿命とも言える特徴は、
二次元の産物であること。セザンヌ、ピカソ、
ダリ:三次元と二次元の融合について、多
くのアーティストたちが様々な方法で取り
組んできましたが、福田美蘭はこういう形
で絵画という制度の解体と再構築をやっ
てのけたのです。

ところで、ここでモデルにされた本家ベラ
スケスの《ラス・メニナス》ですが、実はこ
の絵も、多くの謎を秘めた作品です。肖像
画を描いているベラスケス本人が、画面左手
に描かれており、画家がおそらく描いてい
るであろういわば主役の国王フェリペ4世
夫妻が場面には登場せず、こちらから(即
ち、絵を観る者の位置から)この状況を見
つめていることが、背景の鏡で知られると
いう、大変凝った構成となっています。さて、
絵を借用されたベラスケス、この福田美蘭の
作品を観たら、何と違うのでしょうか?

池田幸子

コンドルズ

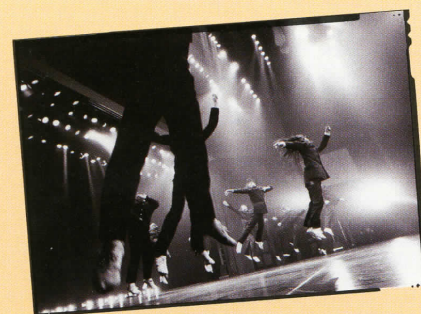
高松スペシャル公演上陸目前!



美術館がミュージアム・ライブをするワケ!

展覧会、作品収集・保存およ
びワークショップといったさま
ざまな目的のための各ハード例え
ば展示室などが機能する中で、
私たちがまず迎えてくれるエン
トランスホールはいい意味で目
的を強制されることのない「あい
まい」な空間だ。オフィスや商店
街と隣接するという立地条件の
ため、ここは美術を目的としな
い人々も、道の延長上として日中
行き交い憩っている。いわば人間
の営みに、不可欠な余裕の空間
であり、それがために気負いなし
時間を過ごせる魅力的なスぺ
ースとも言つて可以的。

そうした状況の中、エントラン
スホールが、美術館やギャラリー
の「ユートラン」な白い壁でもなく、
また劇場のように照明・音響を
きつちりとコントロールできる箱
でもないことを逆手に取って出
来る。その可能性の一つとし
て、ジャンルの狭間にあるような
アートシーンを見せることにあ
ると考える。そのため、小人数編
成のクラシックや民族音楽のコン
サートをはじめ、開館当初から、
ここではダンスシーンで注目を
浴びているコンテンポラリーダン
ス、また日本で生まれた「舞踏」
などが積極的に展開されること
になった。(勅使川原三郎ダンス
公演(1988年)を核として、
毎年パフォーミング・アーツの要
素の強いカンパニーやアーティスト
たちが様々な表現を引っさげ、
高松にやって来た。



「毛利直子」

そして、今年21世紀の幕開け
は、暑苦しさ満開の「学ラン」を
身にまとう男性のみのカンパニー
《コンドルズ》。ペルー生まれの近
藤良平を中心に、体型もキャラ
クターも異なる10名ほどのアク
ターやダンサーたちは、ダンス、映
像、生演奏、人形劇、演劇を縦横
無尽に使いこなす。洗練されたハ
イスビードのダンス、コケティッ
シュで美しくもある股引バレエ、い
きなり登場するカエル君の人物
や操り人形たち、そしてナンセン
スな会話のやり取りに、思わず
笑いが吹き出してしまふ。彼ら
の舞台は何かとつてもなく懐か
しくもあり、またジャンルを錯綜
する構成に面食らいながらも、
その諧謔の連続は私たちを未だ
見ぬ地点へと連れだしてくれる。
「コンドルズ」は21世紀の日本と
いうものを最高に充実した形で
我々に伝えた」とLAタイムズ誌
(01/3/26)は絶賛記事を寄せ
た。また雑誌のインタビューで近
藤良平は「結果的にダンスや芝
居という、枠でくくれないものにな
つて、それがお客さんにも喜ん
でもらえているのが、すごいとい
う」と語っている。12月2日(日)
午後7時開演 コンドルズ高松ス
ペシャル「大航海時代、瀬戸内海
に到来」。私たちはどのような大
海原を体験することになるのか、
この冬、美術館でお見逃しなく!



civiと一緒に美術館を探索してみませんか？今回は美術館の裏方のお話。日ごろ皆さんの目にふれない展示会の準備に迫ります。展示会のオープニング数日前、作品は数台の大型トラックで運搬され、搬入されます。さらに展示会場まで、運送会社の美術専門スタッフの手で大切に運ばれます。大きな作品は台車を使って移動させます。それを迎え入れる会場は清掃の仕上げに取りかかっています。ショーケースの磨き上げは特に念入りに。水滴を発生させないためにも薬品、水の類は一切使用しません。ひたすら、からぶきです。

さて、運びこまれた絵画、版画等は箱から出され、およその位置に壁に立てかけて置かれます。学芸員の指導の下、壁の幅を測ったり、どの作品がどの場所に適しているかを試行錯誤。全体の感じを見ながら大幅な配置変更もあります。高松市美術館の壁は釘を打てない構造のため、密着させて取り付けなければならぬ作品にはバックパネルが使われます。ここで登場するのは、高所の作業用のタワーと大きな道具箱です。そこから取り出したワイヤーの耐荷重は1本につき50キログラム。タワーに登って天井から作品を吊るすためのワイヤーを

取りつけてゆく様は、さながら工事現場のようです。運搬・展示に携わる方が気をつけることは、第1に作品の安全性。そして主催者の要望を取り入れて輸送中の温度・湿度に気をつけながら搬入経路を確保して、それが打合せで決定してから作業に取りかかるそうです。さて、コンディショニングの終わった作品を吊るして準備万端整いました。

一つの展示会開催のために、たくさん

の作業と大勢の気配りが隠されている、こんなことを心の片隅において展示会をご鑑賞ください。〈知ったかぶり？美術館〉、これからも機会があれば美術館の隠れた仕事をご紹介します。どうぞお楽しみに。

【富岡洋子】



美術館の今後の予定(11~3月)

【特別展】

市制施行111周年記念
ボンビドーセンター所蔵 デュフィ展

2001.11.3(土)~12.9(日) 詳細は本紙記事を参照

クールペ展

2002.3.1(金)~3.31(日)

ギュスターヴ・クールペは19世紀リアリズムを代表するフランスの画家です。クールペは風景画、肖像画などあらゆるジャンルに秀作を残していますが、本展では故郷オルナンにあるクールペ美術館所蔵品より、油彩を中心とする約90点の作品でその足跡を回顧します。

【常設展】

第4期常設展 2001.10.27(土)~2002.1.14(月・祝)

展示室1:〈ユーモアと風刺〉池田龍雄、立石大河河、森村泰昌ら日本の現代美術作品。

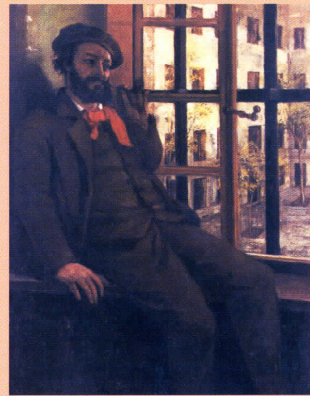
展示室2:〈音丸耕堂の世界〉人間国宝・音丸耕堂の彫漆作品の魅力を紹介。

第5期常設展 2002.1.19(土)~2002.3.31(日)

【ミュージアムライブ】

コンドルズ 高松スペシャル公演 [大航海時代、瀬戸内海に到来]

2001.12.2(日) 午後7時開演予定 チケット(1,500円)は美術館1Fにて発売
詳細は本紙記事を参照



ギュスターヴ・クールペ
《サント・ペラジーでの自画像》(1871)

お問い合わせ

- ◆ボランティア通信「しびのーと」、シビのギャラリートークに関するご意見・ご感想
 - ◆本紙記事「知ったかぶり？美術館」で取り上げてほしいもの
 - ◆美術に関する素朴な疑問...etc.
- などがありましたら、郵送・ファックス・美術館内のアンケート等でお知らせください。シビの活動および、しびのーとの紙面作りの貴重な参考にさせていただきます。

高松市美術館 ボランティア係
〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4
TEL087-823-1711 FAX087-851-7250

利用案内

【開館時間】

火~金:9時30分~19時
土・日・祝日:9時30分~17時
(展示室の入室はいずれも閉館30分前まで)

【休館日】

月曜日(ただし、休日と重なる場合はその翌日)
年末年始(12月29日~1月3日)

私達と鑑賞を一緒にしませんか？

美術館ボランティア「civi(シヴィ)」による
ギャラリートークは特別
展会期中の毎日曜日
および祝日の午前11時~
午後2時~1日2回、2階
展示室にて行います。

作品や作家などの知られざるエピソードが聞けるかも？

編 ● 集 ● 後 ● 記

- 編集に携わっている間に、世界と人の心が大きく揺れました。ピカソが《ゲルニカ》を描いたように、私達に何かができるでしょうか。すべての基本は命だと考えます。美術が、万国共通の、愛と平和を語る言語となることを、心から祈ります。(池田幸子)
- 今回は色々な意味で大変でしたが、その分学ぶ事も多い編集でした。誌上GTではデュフィを調べてみて、改めて興味がわき、カタログではない「本物のデュフィ」に会える日が今から楽しみです。またGTだけでなく、この「しびのーと」への読者の皆さんの声を楽しみにしています。(石床亜希)
- 慌しく仕上げた原稿ですが、どの記事を楽しんでいたかでしょうか。芸術の秋。現実の忙しさの中では美術鑑賞もままならず、とは言え、本の中では感動も味わえます。やっぱり美術館に...。(富岡洋子)
- 直島で「スタンダード」展(12月16日まで)という興味深い展示会が開催されていますが、それを見て印象的だったのは、そこに様々な「出会い」が満ちていたこと。作品とそれが設置されている場所との「出会い」、それらと鑑賞者との「出会い」、そして、展示会を支える親切的ボランティアや島の人の「出会い」。展示会における「人」の大切さが再認識させられました。(学芸員 牧野裕二)
- 9月、ついに幕を開けた(横浜トリエンナーレ2001)。これに《貨物列車》を出品したオノ・ヨーコは同時多発テロが起これば取り止めた。そして彼女は、ジョン・レノンの代表曲「イマジン」の一節の1行をニューヨークタイムズ紙に匿名で全面広告を出した。横浜の《貨物列車》の中から一条の青いサーチライトが夜空を突き抜ける。彼女の馳せる思い「未来への希望」を、私もまた祈る。(学芸員 毛利直子)

発行:高松市美術館
編集:civi デザイン・イラスト:Y&Kデザイン 坂田京子